



Silk TrueLog Explorer 21.0

Silk Test のヘルプ

Micro Focus
The Lawn
22-30 Old Bath Road
Newbury, Berkshire RG14 1QN
UK
<http://www.microfocus.com>

© Copyright 1992-2021 Micro Focus またはその関連会社。

MICRO FOCUS、Micro Focus のロゴおよび Silk Test は、Micro Focus またはその関連会社の商標または登録商標です。

その他、記載の各名称は、各所有社の知的所有財産です。

2021-09-09

目次

入門	4
TrueLog Explorer 概要	4
TrueLog Explorer の UI の概要	4
ビューア パースペクティブ	4
メニュー ツリー	5
ソース ペイン	6
情報ペイン	6
サポート対象のアプリケーション	7
TrueLog Explorer での作業	8
Silk Test Classic で TrueLog を有効にして TrueLog オプションを設定する	8
TrueLog の制限事項と事前要件	8
TrueLog オプションの設定	9
4Test を使用して TrueLog のオプションを構成する	10
スクリプトを使用して実行時に TrueLog を切り替える	10
TrueLog Explorer を使用した結果の表示	11
TrueLog Options - Classic Agent ダイアログ ボックス	11
TrueLog オプション - Open Agent ダイアログ ボックス	14
Silk4J で TrueLog を有効にして TrueLog オプションを設定する	15
Silk Test クライアントにおける TrueLog オプションの設定	16
Eclipse からのテストの再生	16
コマンド ラインからのテストの再生	17
Silk4NET で TrueLog を有効にして TrueLog オプションを設定する	18
TrueLog の有効化	18
Silk Test クライアントにおける TrueLog オプションの設定	19
TrueLog Explorer で TrueLog を開く	20
TrueLog 内のエラーを検索する	20
TrueLog セクション	21
比較モードを有効にする	21
2 つの TrueLog を比較する	22
TrueLog を閉じる	22
Silk Test のパフォーマンスの考慮事項	22
TrueLog を取り扱う場合のヒント	22
TrueLog で非 ASCII 文字が正しく表示されない理由	23

入門

TrueLog Explorer for Silk Test では、テスト スクリプトのデバッグに役立つ強化された機能を提供しています。また、テスト中に発生する予期せぬイベントやエラーの根本原因の分析も可能です。TrueLog Explorer は、テストケースのアクティビティやテスト対象アプリケーションの状態を、グラフィカルにレンダリングして表示します。

TrueLog とは、テストケース アクションやシステム状態の詳細情報をテスト時に記録した履歴ファイルです。Silk Test で、興味のあるアクションやイベントや画像を TrueLog に記録するよう構成します。この情報は、テストを実行したときに収集され、Silk Test で構成した設定を基に選択されます。

テスト実行が終了したら、TrueLog Explorer を使って該当する TrueLog の内容を調査します。

TrueLog Explorer 概要

TrueLog Explorer では以下のことが可能です。


- **重要な情報のキャプチャ** – テストおよびアプリケーションの情報を TrueLog に記録します。
- **スクリーンショットのキャプチャ** – 指定したスクリプト アクションの後のアプリケーションの状態をビットマップでキャプチャします。記憶領域や処理能力を節約したい場合には、スクリーンショットのキャプチャをエラー状況が発生した後だけに限定することができます。
- **TrueLog の比較** – 新しいテスト実行の TrueLog と、アプリケーションが意図したとおりに動いたベースライン テスト実行の TrueLog とを、体系的に比較します。セッションのビットマップを含めることができるため、新しいテスト実行とベースライン テスト実行の差分を簡単に比較できます。
- **4Test スクリプトのエラーと行への直接リンク** – TrueLog Explorer のノードから 4Test コード中の対応する行に直接リンクします。これにより、コード内でエラーなどの問題箇所を検索する作業が簡単になります。

TrueLog Explorer では、記録対象に設定したすべての情報を、多面的に協調させて表示します。

また、TrueLog Explorer は Silk Performer 負荷テストの結果分析もサポートしています。この機能の詳細については、Silk Performer のヘルプを参照してください。

TrueLog Explorer の UI の概要

このセクションでは、TrueLog Explorer のインターフェイスの主要な要素について説明します。インターフェイスの要素は、テスト対象のアプリケーションの種類によって異なることに注意してください。

 **注:** Silk TrueLog Explorer は、Silk Test および Silk Performer に対して作成された TrueLog を両方ともサポートします。Silk Test に対して作成された TrueLog で作業していると、特定のメニュー項目やタブが薄いグレー表示になっていることがあります。これらの要素は、Silk Performer の TrueLog に対してのみサポートされる機能を提供します。

TrueLog Explorer の UI の主要な領域は、**メニュー ツリー**、**ソース ペイン**、および **情報 ペイン** の 3 つです。

ビューア パースペクティブ

ビューア パースペクティブをサポートするのは、TrueLog Explorer で利用できるバージョンの Silk Test のみです。ビューア パースペクティブでは、すべての TrueLog Explorer ビューのコンテキスト メニュー コマンドの一部のみが有効になっており、ワークフロー バーは無効になっています。このパースペクティブの目的は、スクリプトをカスタマイズしないユーザー向けの簡易ビューを提供することと、スクリプト

のカスタマイズを利用できない TrueLog タイプをサポートすることです。Silk Test のテストは、デフォルトではビューア パースペクティブ TrueLog を生成します。

(Silk Performer TrueLog タイプで利用できる) エクスプローラ パースペクティブには、TrueLog Explorer が提供するすべてのスクリプト カスタマイズ機能とワークフロー バーが備わっています。エクスプローラ パースペクティブを利用できる TrueLog タイプの場合は、エクスプローラ パースペクティブとビューア パースペクティブを交互に切り替えることができます。

メニュー ツリー

TrueLog ファイルを開いたら、インターフェイスの左側にあるメニュー ツリーで、テストケースの実行時に保存された TrueLog データを展開または折りたたみできます。ここでは、開いている各 TrueLog ファイルが表示され、取得されたすべての情報へのリンクが含まれています。表示される情報は、Silk Test TrueLog のオプションの選択に応じて構成されます。

TrueLog を選択せずに TrueLog Explorer を開くと、「最初に TrueLog をロードします。」というメッセージが表示されます。

メニュー ツリーには、ノードの階層構造が表示されます。ノードは、TrueLog に含まれるスクリプトやテストケースに対応して存在します。テストケース ノード内の子ノードは、テストケースによって実行されるスクリプト化された各アクション (ボタンのクリック、テキストの入力など) に対応して存在します。また、ノードは、テストケースの実行中にアクティブになったすべてのウィンドウに対応して存在します。

メニュー ツリーに表示されるノードには、以下の項目があります。

- TrueLog ファイル (開いている各 TrueLog ファイルに対して 1 つのノードが存在します)
- ルート (実行ノード)
- テスト計画 (存在する場合)
- スクリプト
- テストケース
- アクティブ ウィンドウ。Silk Test Classic および Classic Agent を使用している場合にのみ表示されます。
- アクション (ユーザーが選択したスクリプト アクション)。Silk Test Classic および Classic Agent を使用している場合にのみ表示されます。

TrueLog 内の各アクティブ ウィンドウまたは各アクション ノードには、ウィンドウがアクティブになったとき、またはアクションが発生したときに存在した GUI コントロール (および実際の値) のリストやスクリーンショットが含まれることがあります。ノードをクリックすると、その内容が表示されます。**情報** ペインには、ノードの履歴の詳細が表示されます。サブフォルダの展開または折りたたみを行う場合は、メニュー ツリーのノードをダブルクリックします。ノードを選択して下向き矢印を押すと、すべてのテスト内のアクションを順番に移動できます。それを行うと、他の 2 つのビューに、選択されたアクションに関連する情報が表示されます。

たとえば、Silk Test Classic および Classic Agent を使用して Web アプリケーションの TrueLog を表示する場合に、メニュー ツリーでノードを選択すると、そのアプリケーションのスクリーンショット (テスト実行時のその時点で表示されたコンテンツ) が表示されます。また、その時点で取得された Web アプリケーションのプロパティが、**情報** ペインに表示されます。

メニュー ツリーでアクションのノードをクリックすると、**ソース** ペインの **アクションの前** タブと **情報** ペインの **コントロール** タブで、コントロールがハイライトされます。



注: 4Test の場合のメニュー ツリーに表示される情報に関する留意事項を以下に示します。

- スクリプトに Main 関数が含まれている場合、Main 関数内にあるスクリプト アクションはスクリプト ノード内に表示されます。
- 状態復元呼び出しは、アプリケーション状態ノードとして表示されます。
- 4Test テスト スクリプト内の要素には、それらに関連付けられた特定のアクションを持たないものがあります。それらの要素に対してメニュー ツリーにノードが作成されます。ノードのタイプは、テスト スクリプトの最初のアクションによって異なります。

- ブラウザテストの場合、各ドキュメント完了イベントに対して、TrueLog にウィンドウ アクティブ ノードが作成されます。

ソース ペイン

TrueLog Explorer は、受信したデータに対して複数のビューを提供します。TrueLog Explorer の上部に表示される **ソース ペイン**には、メニュー ツリーで選択されたノードのコンテンツが表示されます。Silk Test に関連する情報を含まないソース ペイン ビューは非アクティブになります。

ビットマップを取得するように TrueLog Explorer を構成した場合、各アクションが発生するたびに **ソース ペイン**にウィンドウ (またはデスクトップ) のスクリーンショットが表示されます。このビューには、アクションの前の画像を表示する **アクションの前** タブと、結果の画像を表示する **アクションの後** タブがあります。

アクションの前 このビューには、Silk Test がテストケース内の各アクションを実行する直前に取得されたスクリーンショットが表示されます。テストケースの実行中にビットマップが記録されるように指定するには、Silk Test Classic の **TrueLog Options** ダイアログ ボックス、または Silk4J の **スクリプト オプション** ダイアログ ボックスにある **TrueLog** タブを使用します。Silk Test Classic と Classic Agent を使用している場合には、**アクションの前** ビューのスクリーンショット内のコントロールをクリックすると、**コントロール** ビューでそのコントロールが強調表示されます。逆に、コントロール ビュー内のコントロールをクリックすると、アクションの前 ビューのスクリーンショット内のコントロールが強調表示されます。

アクションの後 このビューには、Silk Test がテストケース内の各アクションを実行した直後に取得されたスクリーンショットが表示されます。これらのビットマップは、(Silk Test の **TrueLog Options** ダイアログ ボックスを使用して) ビットマップを記録するように指定した場合に、テストケースの実行中に記録されます。

情報ペイン

情報 ペインは、TrueLog Explorer の右下にあります。ここには、テストケースの実行時にキャプチャされたデータが表示されます。**ソース ペイン**と同様、**情報** ペインにはテスト対象アプリケーションに応じて異なるビューが表示されます。Silk Test に関係のある情報が含まれないビューは、非アクティブになります。

情報 開いている TrueLog ファイルおよび選択されているノードに関する全般的な情報。Silk Test ファイル名、時刻、完了ステータスなど (重要度、時刻、説明を含む)。成功したイメージ検証を開くには、**検証を開く** をクリックします。失敗したイメージ検証を開くには、**相違点の表示** をクリックします。失敗したイメージ検証が、より低い精度レベルで照合していれば成功したと判断された場合は、成功する最高の精度レベルが提示されます。

呼び出し履歴 現在の呼び出しの呼びだし履歴情報。このペインの行をクリックすると、Silk Test が開きます (まだ開いていない場合)。4Test コードを使用している場合、Silk Test によってテストケースの対応する行が開きます。

コントロール このビューは、Silk Test Classic および Classic Agent でのみ使用できます。このビューには、記録されるコントロールに関する情報が表示されます (Silk Test の **TrueLog オプション** ダイアログ ボックスで設定可能)。この情報には、各コントロールの名前、値、型、および以下のいずれか、または複数が含まれます。

- CID – コントロールの ID 値
- PID – 親の ID 値
- TL – ウィンドウの左上からの距離 (ピクセル単位)
- BR – ウィンドウの右下からの距離 (ピクセル単位)

サポート対象のアプリケーション

Silk Test Classic と Classic Agent を使用している場合、Silk Test に対して TrueLog Explorer を使用して、次の種類のアプリケーションのテスト データを記録することができます。

- クライアント/サーバー アプリケーション
- Web アプリケーション
- Java アプリケーション (Windows やブラウザをベースとしたアプリケーションやアプレット)
- .NET アプリケーション (Windows やブラウザをベースとしたアプリケーション)

Silk Test Classic、Silk4J、または Silk4NET で Open Agent を使用している場合、Silk Test に対して TrueLog Explorer を使用して、すべての種類のサポートするアプリケーションのテスト データを記録することができます。

TrueLog Explorer での作業

このセクションでは、TrueLog Explorer を使用して、TrueLog ファイルを取り扱う方法について説明します。TrueLog は、視覚的検証を使用して失敗したテストケースの根本原因分析を容易にする強力な技術です。

テスト実行の結果は、TrueLog Explorer で調査できます。

Silk Test Classic と Classic Agent で作業している場合、テスト実行時にエラーが発生したときに TrueLog Explorer を使用すると、エラーが生成された 4Test スクリプト内の行を簡単に見つけられます。これを行うには、エラーに関連付けられた TrueLog アクション ノードをクリックします。Silk Test にスクリプト ファイルが表示され、問題を検討できるようにスクリプト内の該当する行にジャンプします。

比較モードを使用すると、TrueLog を並べて比較できます。また、比較対象の TrueLog をノードごとに対応させて移動する機能が有効になります。これは、同じテスト スクリプトから生成された別個のテスト実行の結果を比較する場合に役に立ちます。


Silk Test Classic で TrueLog を有効にして TrueLog オプションを設定する

TrueLog Explorer を使用して TrueLog の生成およびそのコンテンツの表示を行う前に、Silk Test クライアントで TrueLog を有効にする必要があります。

TrueLog Explorer を有効化または無効化することができます：

- すべてのテスト ケースに対して、**TrueLog Options** ダイアログ ボックスを使用して。
- 特定のテスト ケースを実行するときに **Run Testcase** ダイアログ ボックスを使用して。
- 実行時にテスト スクリプトを使用して。

Run Testcase ダイアログ ボックスで TrueLog Explorer を有効化または無効化すると、Silk Test Classic は **TrueLog Options** ダイアログ ボックスに対して同じ変更を加えます。同様に、**TrueLog Options** ダイアログ ボックスで TrueLog Explorer を有効化または無効化すると、Silk Test Classic は **Run Testcase** ダイアログ ボックスに対して同じ変更を加えます。

 **注:** デフォルトでは、Open Agent を使用している場合は TrueLog Explorer は有効化され、Classic Agent を使用している場合は無効化されています。TrueLog Explorer が有効化されている場合のデフォルトの設定は、スクリプトでエラーが発生した場合にのみスクリーンショットが作成され、エラーのあるテスト ケースのみが記録されます。

TrueLog の制限事項と事前要件

Silk Test Classic で TrueLog を使用している場合、次の制限事項と事前要件が適用されます。

リモート エージェント	リモート エージェントを使用している場合、TrueLog ファイルもリモート マシン上に出力されます。
スイート	スイートの実行時には TrueLog はサポートされません。
混合エージェント スクリプト	混合エージェント スクリプト (両方のエージェントを使用するスクリプト) の実行時には TrueLog はサポートされません。
マルチ エージェント スクリプト	TrueLog は、単一のローカルまたはリモート エージェントで実行するスクリプトでのみサポートされます。リモート エージェントを使用している場合、TrueLog ファイルもリモート マシン上に出力されます。

Open Agent スクリプト	Open Agent スクリプトで TrueLog Explorer を使用するには、ツールバー上でデフォルト エージェントを Open Agent に設定します。
Classic Agent スクリプト	Classic Agent スクリプトで TrueLog Explorer を使用するには、ツールバー上でデフォルト エージェントを Classic Agent に設定します。

TrueLog オプションの設定

TrueLog を有効化したり、TrueLog が収集するテスト結果情報をカスタマイズするために、TrueLog オプションを設定します。

ビットマップとコントロールを TrueLog に記録すると、パフォーマンスに悪影響が出ることがあります。ビットマップをキャプチャして情報を記録すると TrueLog ファイルが大きくなることがあるので、エラーを含むテストケースのみを記録するように、詳細情報が必要なテストケース用に TrueLog オプションを調整できます。



注: Silk Test 17.5 以降では、Open Agent を使用した場合に、TrueLog ファイルのサイズを小さくするために、TrueLog ファイルのファイル形式が .xlg 形式から .tlz 形式に変更されました。 .xlg 拡張子のファイルには、自動的に .tlz 拡張子が追加されます。 .tlz 形式の結果データを解析するときには、.tlz ファイルを展開し、展開された .xlg ファイルを使ってデータを解析することもできます。 Classic Agent では、.xlg ファイル形式が使用されます。

1. **オプション > TrueLog** をクリックして、**TrueLog オプション** ダイアログ ボックスを開きます。
2. TrueLog データをキャプチャし、ログの記録設定を有効にするには、**TrueLog の有効化** チェック ボックスをオンにし、キャプチャするデータを次から選択します。

すべてのテストケース 成功および失敗にかかわらずすべてのテストケースのアクティビティを記録します。この設定にすると、TrueLog ファイルが大きくなる可能性があります。

エラーのあるテストケース エラーのあるテストケースに対してのみアクティビティを記録します。これは、デフォルトの設定です。

3. **TrueLog の場所** フィールドで TrueLog ファイルの名前とパス（省略可能）を入力するか、**参照** をクリックしてファイルを選択します。
4. Classic Agent を使用している場合にのみ、**TrueLog Presets** セクションで記録するログレベルの事前設定値で設定できます。

Minimal エラー時にデスクトップのビットマップ取得を有効にします。操作は記録されません。

Default エラー時にデスクトップのビットマップ取得を有効にします。Select および SetText 操作のデータを記録し、Select および SetText 操作のビットマップを取得します。

Full すべてのコントロール情報を記録します。また、MouseMove イベントを除くブラウザのすべてのイベントを記録し、エラー時にウィンドウのビットマップ取得を有効にします。すべてのアクションのビットマップを取得します。

Full ログレベルを有効にしたときに、Window Not Found エラーが発生した場合、手動でスクリプトを編集する必要があります。

5. Classic Agent を使用している場合にのみ、**Log the following for controls** セクションで、記録する作業中のウィンドウのコントロールについての情報の種類を指定します。
6. Classic Agent を使用している場合にのみ、**Log the following for browsers** セクションで、記録するブラウザのイベントを指定します。
7. ビットマップを記録する前に、Windows がアプリケーション ウィンドウを描画する時間を指定します。
 - Classic Agent を使用している場合、**TrueLog Delay** フィールドに遅延時間を指定します。
 - Classic Agent を使用している場合、**Screenshot mode** セクションの **Delay** フィールドに遅延時間を指定します。

遅延時間は、ブラウザ テストで使用されます。スクリプトに Browser.WaitForReady 呼び出しを挿入すると、確実に DocumentComplete イベントが発生し処理されるようにできます。WindowActive ノ

ードが TrueLog に存在しない場合、Browser.WaitForReady 呼び出しを追加する必要があります。遅延を使用して、スクリプトのパフォーマンスを最適化することもできます。遅延時間は、正しい動作を実現し、かつスクリプトの実行時間への影響が最低限になるように、可能な限り小さい値を設定します。デフォルト設定は 0 です。

8. テスト対象アプリケーションのスクリーンショットを取得するには：

- Classic Agent を使用している場合、**Enable Bitmap Capture** チェックボックスをオンにし、キャプチャするビットマップを選択します。
- Open Agent を使用している場合、Silk Test Classic がスクリーンショットをキャプチャする方法を、**スクリーンショットモード** セクションで設定します。

9. Classic Agent を使用している場合にのみ、**Action Settings** タブで TrueLog に含めるスクリプト操作を選択できます。

有効した操作は、TrueLog のツリー リスト ビューにノードとして表示されます。

10 Classic Agent を使用している場合にのみ、**Select Actions to Log** セクションで、**Enable** チェックボックスをオンにすると、対応する 4Test 操作がログに記録されます。それぞれの操作は、4Test メソッドに対応します (Click と Select 以外)。

11 Classic Agent を使用している場合にのみ、**Select Actions to Log** セクションで、**Bitmap** リストボックスからビットマップを記録するタイミングを選択します。

12 OK をクリックします。

4Test を使用して TrueLog のオプションを構成する

この機能がサポートされるのは、Classic Agent を使用している場合のみです。詳細については、『[Silk Test Classic Classic Agent ヘルプ](#)』を参照してください。

TrueLog のオプションは **TrueLog Options** ダイアログ ボックスを使用して設定することをお勧めしますが、テストケース内で OPT_TRUELOG エージェント オプションおよび TRUELOGOPTIONS レコードタイプを使用して操作することもできます。

Agent.SetOption、Agent.GetOption()、および BindAgentOption() の使用方法については、Silk Test のヘルプを参照してください。

1. テストケース内で truelog.inc を呼び出します。

2. 特定のオプションの値を設定します。
ビットマップを有効にする例を次に示します。

```
[ ] use "truelog.inc"
[ ]
[ ] TRUELOGOPTIONS rTLOpts
[ ] TRUELOGOPTIONS rOldTLOpts
[ ]
[-] testcase TestTrueLogOptions () appstate none
[ ] rTLOpts = Agent.GetOption (OPT_TRUELOG)
[ ] print (rTLOpts) //print the original TrueLog options
[ ] rTLOpts.iActionSetText = TL_ACTION_ENABLE_BEFORE_BITMAPS
[ ] rTLOpts.iActionSelect = TL_ACTION_ENABLE_BOTH_BITMAPS
[ ] rOldTLOpts = Agent.SetOption (OPT_TRUELOG, rTLOpts)
[ ] print (rTLOpts) // print the new TrueLog options
```

3. **File > Save** を選択します。

スクリプトを使用して実行時に TrueLog を切り替える

この機能がサポートされるのは、Classic Agent を使用している場合のみです。詳細については、『[Silk Test Classic Classic Agent ヘルプ](#)』を参照してください。

TrueLog Explorer を実行時に切り替えて、テスト結果ファイルを分析したり、各アクションの前後のスクリーンショットをキャプチャしたり、エラーが発生したときにスクリーンショットをキャプチャすることができます。

テストスクリプトを使用して、テストケースの実行中に TrueLog Explorer を何回でも切り替えることができます。たとえば、複数のユーザー インターフェイスのメニューをテストするテストケースを実行している場合、スクリプトの実行中に TrueLog のオン/オフを何度も行っても、メニュー部分だけのビットマップをキャプチャさせることができます。

1. TrueLog Explorer オプションを設定することで、TrueLog Explorer をキャプチャしたいタイミングを定義できます。
2. 変更したいスクリプトを作成または開きます。
3. スクリプト内のオンまたはオフにしたい場所に移動します。
4. TrueLog をオフにするには、次のように入力します： `SetOption(OPT_PAUSE_TRUELOG, TRUE)`。
5. TrueLog をオンにするには、次のように入力します： `SetOption(OPT_PAUSE_TRUELOG, FALSE)`。
6. **File > Save** をクリックして、スクリプトを保存します。

TrueLog Explorer を使用した結果の表示

TrueLog Explorer を使用すると、テスト結果ファイルを分析したり、操作の前後や、エラー時にスクリーンショットをキャプチャすることができます。

1. TrueLog Explorer オプションを設定します。
2. テストケースを実行します。
3. 次のいずれか 1 つを選んでください：
 - **Results > Launch TrueLog Explorer** をクリックします。
 - **Basic Workflow** または **Data Driven Workflow** バーにある **Explore Results** ボタンをクリックします。
4. **Results Files** ダイアログ ボックスで、検討したいファイル名に移動して、**開く** をクリックします。


デフォルトでは、結果ファイルの名前は、実行されたスクリプト、スイート、またはテスト計画と同じになります。**TrueLog Explorer** でファイルを確認するには、.tlz ファイルを開きます。Silk Test Classic 結果ファイルを Silk Test Classic で確認するには、.res ファイルを開きます。

TrueLog Options - Classic Agent ダイアログ ボックス

TrueLog Options - Classic Agent ダイアログ ボックスを使用して、TrueLog を Classic Agent に対して有効化したり、Silk Test Classic に対して TrueLog が収集する情報をカスタマイズします。

Options > TrueLog をクリックします。

ビットマップやコントロールを TrueLog で記録すると、Silk Test Classic のパフォーマンスに悪影響を及ぼすことがあります。ビットマップの取得や情報の記録を行うと TrueLog ファイルが大きくなることがあるので、エラーとなったテストケースのみを記録し、より情報が必要なテストケースに対して TrueLog オプションを調整したい場合があります。

 **注:** デフォルトでは、Open Agent を使用している場合は TrueLog Explorer は有効化され、Classic Agent を使用している場合は無効化されています。TrueLog Explorer が有効化されている場合のデフォルトの設定は、スクリプトでエラーが発生した場合にのみスクリーンショットが作成され、エラーのあるテストケースのみが記録されます。

TrueLog Explorer に関する追加の情報については、『[Silk TrueLog Explorer Silk Test のヘルプ](#)』を参照してください。

Logging Settings タブ

TrueLog のキャプチャを有効化し、TrueLog を設定します。

Enable TrueLog

TrueLog データをキャプチャし、ログ設定を有効化します。テストケースを実行するときに **Run Testcase** ダイアログ ボックスのチェック ボックスを切り替えて、TrueLog の有効化/無効化を変更することもできます。 **Run Testcase** ダイアログ ボックスで TrueLog を有効化または無効化すると、Silk Test Classic は **TrueLog Options** ダイアログ ボックスに対して同じ変更を加えます。同様に、 **TrueLog Options** ダイアログ ボックスで TrueLog を有効化または無効化すると、Silk Test Classic は **Run Testcase** ダイアログ ボックスに対して同じ変更を加えます。

All testcases 成功および失敗にかかわらずすべてのテストケースのアクティビティを記録します。

Testcases with errors エラーのあるテストケースのアクティビティのみを記録します。

TrueLog file

TrueLog ファイルの場所と名前を設定します。このパスは、エージェントが実行しているマシン上での相対パスです。デフォルトの名前は、結果ファイルに使用した名前に .xlg 拡張子を付けたものになります。デフォルトの場所はテスト ケースの .res ファイルと同じフォルダになります。



注: このフィールドにローカルまたはリモート パスを入力した場合、そのパスはスクリプトが実行されるまで検証されません。

Log the following for controls

アクティブなウィンドウまたはページのコントロールについての特定の種類の情報を記録します。

Control information

アクティブなウィンドウまたはページに対する GUI コントロールの階層、名前、種類、およびその他の属性を記録します。この情報は、TrueLog Explorer の **情報** ウィンドウの **コントロール** タブに表示されます。TrueLog を有効化したとき、これはデフォルトで選択されています。コントロールの情報を記録する場合、次の記録する内容を選択することができます。

Control creation/deletion アクティブ ウィンドウまたはページでのコントロールの作成/削除を追跡します。TrueLog は、各アクションの後にコントロールの階層を更新します。このオプションを選択すると、パフォーマンスに悪影響を及ぼすことがあります。

Include static text controls 記録される階層に静的テキスト コントロールを含めます。TrueLog のサイズを小さくするために、ブラウザのテストでは、このオプションを無効にしておきます。

Track low level events キーボードおよびマウス イベントを記録します。マウスのクリックやキーの押し下げのたびに、新しい **アクション** ノードが TrueLog のツリー リストに作成されます。ブラウザ アプリケーションに対してこのオプションを選択する際には、パフォーマンスに重大な影響を与える可能性があることにご注意ください。

Log the following for browsers

キャプチャしたいブラウザ イベントを識別します。

Download events ページのダウンロードをトリガするすべてのイベントを取得します。デフォルトで選択されています。

Navigate events 新しいページを表示するすべてのイベントを取得します。デフォルトで選択されています。

Terminate events ブラウザを閉じるすべてのイベントを取得します。デフォルトで選択されています。

New window events	新しいブラウザ ウィンドウを表示するすべてのイベントを取得します。デフォルトで選択されています。
MouseMove calls	スクリプト化されたすべての MouseMove 呼び出しを記録します。これは、JavaScript の MouseOver イベントを追跡する場合に便利です。この情報を TrueLog に含めると、パフォーマンスに重大な影響を与えることがあります。この情報は、ツリー リストに アクション ノードとして表示されます。

TrueLog delay ビットマップを取得する前にアプリケーション ウィンドウを描画する時間を Windows に与えます。遅延時間は、ブラウザ テストで使用できます。Browser.WaitForReady 呼び出しをスクリプトに挿入すると、DocumentComplete イベントが発生し、処理されたことを保証できます。TrueLog に **WindowActive** ノードが存在しない場合は、Browser.WaitForReady 呼び出しを追加する必要があります。また、スクリプトのパフォーマンスを最適化するために TrueLog Delay (遅延時間) を使用することもできます。スクリプトの実行時間への影響を最小限にし、正しく動作させるためには、遅延時間をできるだけ短く設定します。デフォルト設定は 0 です。

Enable bitmap capture

テスト対象アプリケーションの再生中に TrueLog がテスト アプリケーションのスクリーンショットをキャプチャするタイミングを制御します。ビットマップ ファイルは、TrueLog (.xlg) ファイルに格納されます。デフォルトで選択されています。

As specified on action settings tab **Action Settings** タブで選択したアクションの種類それぞれに対してビットマップのキャプチャを有効化します。また、この設定は、アプリケーションでウィンドウがアクティブになるたびにビットマップをキャプチャします。

On error テストケースでエラーが発生した場合にビットマップを取得します。

Window only アクティブ ウィンドウのビットマップを保存します。

Desktop デスクトップ全体のビットマップを保存します。

Before error bitmap エラーが発生する前のビットマップを取得します。

TrueLog Presets

事前定義されたログ レベルに設定します。

Minimal エラーのあるテストケースを記録し、エラー時にデスクトップのビットマップ取得を有効にします。アクションは記録しません。

Default エラーのあるテストケースを記録し、エラー時にウィンドウのビットマップ取得を有効にします。Select アクションおよび SetText アクションのデータを記録し、この 2 つのアクションのビットマップ取得を有効にします。

Full すべてのテストケースを記録し、すべてのコントロール情報を記録します。また、MouseMove イベントを除くブラウザのすべてのイベントを記録し、エラー時にウィンドウのビットマップ取得を有効にします。すべてのアクションのビットマップを取得します。

Full ログを有効化すると、ウィンドウが見つかりません エラーが発生し、スクリプトを手動で編集することが必要になる場合があります。

Action Settings タブ

TrueLog Options - Classic Agent ダイアログ ボックスの **Action Settings** タブでは、TrueLog に記録したいスクリプト化されたアクションを選択します。有効にすると、これらのアクションは、TrueLog のツリー リストにノードとして表示されます。

Select actions to log	Enable	記録するアクションを選択します。各アクションは、Click と Select を除き、4Test メソッドに対応しています。
	Click	PushButton、ScrollBar、TextField、HtmlLink などの多くのコントロールに対するマウス クリックを記録します。CheckBox の Click メソッドを記録するには、Click ではなく Select を選択します。
	Select	ListBox、TreeView、ComboBox、RadioButton、CheckBox などの複数種類のコントロールの複数のメソッドのアクションを記録します。以下に、Select によって記録されるアクションの一部を示します。 <ul style="list-style-type: none">• Select (ListBox、TreeView、ComboBox、RadioButton)• DoubleSelect、SelectList、SelectRange (ListBox、TreeView)• Click (ListBox、TreeView、ComboBox、RadioButton、CheckBox)• Check、Uncheck、Toggle、SetState (CheckBox)
	Bitmap	ビットマップをキャプチャするタイミングを選択します。 <ul style="list-style-type: none">None ビットマップをキャプチャしません。Before エラーが発生する前のビットマップをキャプチャします。After エラーが発生した後のビットマップをキャプチャします。Both エラーが発生する前と後のビットマップをキャプチャします。

TrueLog オプション - Open Agent ダイアログ ボックス

TrueLog オプション - Open Agent ダイアログ ボックスを使用して、Open Agent に対して TrueLog を有効化したり、TrueLog が Silk Test Classic のために収集する情報をカスタマイズできます。

オプション > **TrueLog** をクリックします。

さらに、**差分ビューア** を使用して、Open Agent を使用するテストケースの結果を分析できます。

ビットマップとコントロールを TrueLog に記録すると、Silk Test Classic のパフォーマンスに悪影響が出ることがあります。ビットマップをキャプチャして情報を記録すると TrueLog ファイルが大きくなることがあるので、エラーを含むテストケースのみを記録するように、詳細情報が必要なテストケース用に TrueLog オプションを調整できます。



注: デフォルトでは、Open Agent を使用している場合は TrueLog Explorer は有効化され、Classic Agent を使用している場合は無効化されています。TrueLog Explorer が有効化されている場合のデフォルトの設定は、スクリプトでエラーが発生した場合にのみスクリーンショットが作成され、エラーのあるテストケースのみが記録されます。

TrueLog Explorer に関する追加の情報については、『[Silk TrueLog Explorer Silk Test のヘルプ](#)』を参照してください。

Enable TrueLog

TrueLog データをキャプチャし、ログ設定を有効化します。テストケースを実行するときには **Run Testcase** ダイアログ ボックスのチェック ボックスを切り替えて、TrueLog の有効化/無効化を変更することもできます。 **Run Testcase** ダイアログ ボックスで TrueLog を有効化または無効化すると、Silk Test Classic は **TrueLog Options** ダイアログ ボックスに対して同じ変更を加えます。同様に、 **TrueLog Options** ダイアログ ボックスで TrueLog を有効化または無効化すると、Silk Test Classic は **Run Testcase** ダイアログ ボックスに対して同じ変更を加えます。

All testcases 成功および失敗にかかわらずすべてのテストケースのアクティビティを記録します。

Testcases with errors エラーのあるテストケースのアクティビティのみを記録します。

TrueLog の場所

パスは、エージェントを実行しているマシンの相対パスです。デフォルト パスは Silk Test プロジェクト フォルダのパスであり、デフォルトの名前はスイート クラスの名前に拡張子 .tlz を付けたものになります。テストを並列実行する場合などに、TrueLog ファイルが上書きされないようにするため、TrueLog ファイル名にプレースホルダーを使用することができます。これらのプレースホルダーは、実行時に適切なデータに置換されます。



注: パスは、実行時に検証されます。Silk Central によって実行されるテストは、スクリーンショットを結果ビューに表示できるようにするために、この値を Silk Central 結果ディレクトリに設定します。

スクリーンショットモード

TrueLog Explorer がテスト対象アプリケーションの再生時に、キャプチャするテスト アプリケーションの画面を設定します。ビットマップ ファイルは、TrueLog ファイル (.xlg) に含まれます。



注: エラーのあるテストケースの場合、選択したスクリーンショット モードに関係なく、TrueLog Explorer は常に画面をキャプチャします。

なし 再生中に画面をキャプチャしません。

アクティブ ウィンドウ 再生中にテスト アプリケーションのアクティブ ウィンドウのみをキャプチャします。

アクティブ アプリケーション テスト アプリケーションとテスト アプリケーション内のすべてのウィンドウをキャプチャします。

デスクトップ デスクトップ領域全体をキャプチャします。


遅延

ビットマップが撮影される前に、オペレーティング システムがアプリケーション ウィンドウを描画する時間を確保できます。スクリプトのパフォーマンスを最適化するために、Delay を使用することもできます。遅延時間は、正しい動作を実現し、かつスクリプトの実行時間への影響が最低限になるように、可能な限り小さい値を設定します。デフォルト設定は 0 です。

Silk4J で TrueLog を有効にして TrueLog オプションを設定する

TrueLog Explorer を使用して TrueLog の生成およびそのコンテンツの表示を行う前に、Silk Test クライアントで TrueLog を有効にする必要があります。さらに、Silk4J テストとしてテスト ケースを実行する必要があります。


Silk4J で作業している場合は、**スクリプト オプション** ダイアログ ボックスの **TrueLog** タブで、TrueLog Explorer を有効化または無効化できます。

 **注:** Silk4J を使用している場合、デフォルトで TrueLog Explorer は有効化されています。

Silk Test クライアントにおける TrueLog オプションの設定

ビットマップをキャプチャして Silk Test クライアントの情報を記録するように TrueLog を有効化します。

ビットマップとコントロールを TrueLog に記録すると、Silk Test のパフォーマンスに悪影響が出る場合があります。ビットマップをキャプチャして情報を記録すると TrueLog ファイルが大きくなることがあるので、エラーを含むテストケースのみを記録するように、詳細情報が必要なテストケース用に TrueLog オプションを調整できます。

 **注:** Silk Test 17.5 以降では、TrueLog ファイルのサイズを小さくするために、TrueLog ファイルのファイル形式が .xlg 形式から .tlz 形式に変更されました。.xlg 拡張子のファイルには、自動的に .tlz 拡張子が追加されます。.tlz 形式の結果データを解析するときには、.tlz ファイルを展開し、展開された .xlg ファイルを使ってデータを解析することもできます。


TrueLog を有効にして、TrueLog が Silk Test クライアント用に収集する情報をカスタマイズするには、次の手順に従います。

1. メニューで、Silk Test クライアントのメニュー項目をクリックして、**オプションの編集** をクリックします。**スクリプト オプション** ダイアログ ボックスが開きます。
2. **TrueLog** タブをクリックします。
3. **基本設定** 領域で **TrueLog の有効化** チェック ボックスをオンにします。

- 正常なものとエラーになったものを両方とも含めて、すべてのテストケースのアクティビティを記録するには、**すべてのテストケース** をクリックします。これはデフォルトの設定です。
- エラーが発生したテストケースのみのアクティビティを記録するには、**エラーのあるテストケース** をクリックします。

4. **TrueLog の場所** フィールドで TrueLog ファイルのパスと名前を入力するか、**参照** をクリックしてファイルを選択します。

パスは、エージェントを実行しているマシンの相対パスです。デフォルトパスは Silk Test プロジェクトフォルダのパスであり、デフォルトの名前はスイート クラスの名前に拡張子 .tlz を付けたものになります。テストを並列実行する場合などに、TrueLog ファイルが上書きされないようにするため、TrueLog ファイル名にプレースホルダーを使用することができます。これらのプレースホルダーは、実行時に適切なデータに置換されます。

 **注:** パスは、実行時に検証されます。Silk Central によって実行されるテストは、スクリーンショットを結果ビューに表示できるようにするために、この値を Silk Central 結果ディレクトリに設定します。

5. **スクリーンショット モード** を選択します。

デフォルトは、**エラー時** です。

6. 省略可能：**遅延** を設定します。

この遅延により、ビットマップが撮影される前にオペレーティング システムがアプリケーション ウィンドウを描画する時間を確保できます。キャプチャされたビットマップでアプリケーションが適切に描画されない場合は、遅延時間を増やしてください。

7. **OK** をクリックします。

Eclipse からのテストの再生

1. 再生するテスト メソッドまたはキーワード駆動テストに移動します。
2. 次のいずれか 1 つのステップを行います：

- パッケージ内のすべてのテスト メソッドまたはキーワード駆動テストを再生するには、**パッケージ エクスプローラー** で、パッケージ名を右クリックします。
- クラス内のすべてのテスト メソッドを再生するには、**パッケージ エクスプローラー**で、クラス名を右クリックします。または、ソース エディタでそのクラスを開き、ソース エディタで右クリックします。
- キーワード駆動テストを再生するには、**パッケージ エクスプローラー** で、キーワード駆動テストの名前を右クリックします。
- 特定のメソッドのみのテストを再生するには、**パッケージ エクスプローラー** で、メソッド名を右クリックします。または、ソース エディタでそのクラスを開き、テスト メソッドの名前をクリックして選択してから右クリックします。

3. 実行 > Silk4J テスト を選択します。



注: 実行 > JUnit テスト を選択すると、多くの Silk4J 機能が無効になるため、利用できません。

4. Web アプリケーションをテストする場合は、**ブラウザーの選択** ダイアログ ボックスが開きます。ブラウザーを選択して、**実行** をクリックします。
5. 省略可能：必要に応じて、両方の **Shift** キーを同時に押して、テストの実行を停止できます。
6. テストの実行が完了すると、**再生完了** ダイアログ ボックスが開きます。**結果の検討** をクリックして、完了したテストの TrueLog を確認します。

コマンド ラインからのテストの再生

このタスクを実行する前に、JDK の場所を参照できるように PATH 変数を更新する必要があります。詳細については、『[JDK Installation for Microsoft Windows](#)』を参照してください。

1. CLASSPATH に以下を含めます。

- junit.jar
- org.hamcrest.core JAR ファイル
- silktest-jtf-nodeps.jar。JAR ファイルは、Silk Test インストール ディレクトリ下にある ng¥JTF サブフォルダにあります (C:¥Program Files (x86)¥Silk¥SilkTest¥ng¥JTF など)。



注: ng ディレクトリへのフルパスを指定するのではなく、%OPEN_AGENT_HOME% を使用することを Micro Focus では推奨しています (%OPEN_AGENT_HOME%¥JTF など)。これにより、柔軟性が増し、Silk Test がデフォルトの場所にインストールされなくても機能するようになります。

- コンパイル済みテストを含んだ JAR またはフォルダー
- SV Lab クライアント ライブラリ (サービスの仮想化を使用している場合) :

```
%OPEN_AGENT_HOME%¥SVLabConnector¥SVLabClient¥lib¥*
```

クラスパスは以下のようになります。

```
set CLASSPATH=<eclipse_install_directory>¥plugins
¥org.junit4_4.3.1¥junit.jar;<eclipse_install_directory>¥plugins
¥org.hamcrest.core_1.3.0.v201303031735.jar;%OPEN_AGENT_HOME%¥JTF¥silktest-jtf-
nodeps.jar;C:¥myTests.jar
```

サービスの仮想化を使用している場合は、クラスパスは以下のようになります。

```
set CLASSPATH=<eclipse_install_directory>¥plugins
¥org.junit4_4.3.1¥junit.jar;<eclipse_install_directory>¥plugins
¥org.hamcrest.core_1.3.0.v201303031735.jar;%OPEN_AGENT_HOME%¥JTF¥silktest-jtf-
nodeps.jar;C:¥myTests.jar;%OPEN_AGENT_HOME%¥SVLabConnector¥SVLabClient¥lib¥*;
```

2. 次のように入力して JUnit テスト メソッドを実行します :

```
java org.junit.runner.JUnitCore <test class name>
```



注: トラブルシューティングの情報については、次の JUnit のドキュメントを参照してください：
http://junit.sourceforge.net/doc/faq/faq.htm#running_1。

3. Silk4J を使用していくつかのテスト クラスを実行して TrueLog を作成するには、SilkTestSuite クラスを使用して Silk4J テストを実行します。
たとえば、2 つのクラス `MyTestClass1` と `MyTestClass2` を TrueLog を有効にして実行するには、次のコードをスクリプトに入力します。

```
package demo;
import org.junit.runner.RunWith;
import org.junit.runners.Suite.SuiteClasses;
import com.borland.silktest.jtf.SilkTestSuite;

@RunWith(SilkTestSuite.class)
@SuiteClasses({ MyTestClass1.class, MyTestClass2.class })
public class MyTestSuite {}
```


これらのテスト クラスをコマンド ラインから実行するには、次のように入力します。

```
java org.junit.runner.JUnitCore demo.MyTestSuite
```

Silk4NET で TrueLog を有効にして TrueLog オプションを設定する

TrueLog Explorer を使用して TrueLog の生成およびそのコンテンツの表示を行う前に、Silk Test クライアントで TrueLog を有効にする必要があります。さらに、Visual Studio 単体テスト フレームワークを使用している既存の Silk4NET スクリプトに対して TrueLog を有効にするには、スクリプト内のすべてのテストクラスの `TestClass` 属性を `SilkTestClass` 属性で置き換える必要があります。

Silk4NET で作業している場合は、**スクリプト オプション** ダイアログ ボックスの **TrueLog** タブで、TrueLog Explorer を有効化または無効化できます。

 **注:** Silk4NET を使用している場合、デフォルトで TrueLog Explorer は有効化されています。

TrueLog の有効化

新しい Silk Test スクリプトでは、TrueLog がデフォルトで有効になっています。**スクリプト オプション** ダイアログ ボックスの **TrueLog** タブにある **TrueLog の有効化** チェック ボックスのオン/オフを切り替えて、TrueLog を有効、または無効にすることができます。**スクリプト オプション** ダイアログ ボックスを開くには、**Silk4NET > オプションの編集** をクリックします。

Visual Studio Unit Testing Framework を使用している既存の Silk Test スクリプトで TrueLog を有効にするには、スクリプト内のすべてのテストクラスの `TestClass` 属性を `SilkTestClass` 属性で置き換える必要があります。

既存の Silk Test スクリプトに対して TrueLog を有効にするには：

1. TrueLog を有効にするテスト クラスが含まれたスクリプトを開きます。
2. テスト クラスに `SilkTestClass` 属性を追加します。

デフォルトでは、Visual Studio ソリューション ファイルおよび Visual Studio Unit Testing Framework の結果が格納されているディレクトリの `TestResults` サブディレクトリに TrueLog が作成されます。TrueLog の別の場所を指定するには、**Silk4NET > オプションの編集** をクリックして **スクリプト オプション** ダイアログ ボックスを開き、**TrueLog ファイル** フィールドの右側にある **参照** をクリックします。

Visual Studio ソリューション ファイルには、Silk Test スクリプトが格納されています。Silk Test テストの実行が完了したら、ダイアログ ボックスが開きます。**結果の検討** をクリックすると、完了したテストの TrueLog を確認できます。

使用例

Visual Basic スクリプト内のクラスに対して TrueLog を有効にするには、以下のコードを使用します。

```
<SilkTestClass()> Public Class MyTestClass
  <TestMethod()> Public Sub MyTest()
    ' my test code
  End Sub
End Sub
```


C# スクリプト内のクラスに対して TrueLog を有効にするには、以下のコードを使用します。

```
[SilkTestClass]
public class MyTestClass {
  [TestMethod]
  public void MyTest() {
    // my test code
  }
}
```

Silk Test クライアントにおける TrueLog オプションの設定

ビットマップをキャプチャして Silk Test クライアントの情報を記録するように TrueLog を有効化します。

ビットマップとコントロールを TrueLog に記録すると、Silk Test のパフォーマンスに悪影響が出る場合があります。ビットマップをキャプチャして情報を記録すると TrueLog ファイルが大きくなるため、エラーを含むテストケースのみを記録するように、詳細情報が必要なテストケース用に TrueLog オプションを調整できます。

 **注:** Silk Test 17.5 以降では、TrueLog ファイルのサイズを小さくするために、TrueLog ファイルのファイル形式が .xlg 形式から .tlz 形式に変更されました。.xlg 拡張子のファイルには、自動的に .tlz 拡張子が追加されます。.tlz 形式の結果データを解析するときには、.tlz ファイルを展開し、展開された .xlg ファイルを使ってデータを解析することもできます。

TrueLog を有効にして、TrueLog が Silk Test クライアント用に収集する情報をカスタマイズするには、次の手順に従います。

1. メニューで、Silk Test クライアントのメニュー項目をクリックして、**オプションの編集** をクリックします。**スクリプト オプション** ダイアログ ボックスが開きます。
2. **TrueLog** タブをクリックします。
3. **基本設定** 領域で **TrueLog の有効化** チェック ボックスをオンにします。
 - 正常なものとエラーになったものを両方とも含めて、すべてのテストケースのアクティビティを記録するには、**すべてのテストケース** をクリックします。これはデフォルトの設定です。
 - エラーが発生したテストケースのみのアクティビティを記録するには、**エラーのあるテストケース** をクリックします。
4. **TrueLog の場所** フィールドで TrueLog ファイルのパスと名前を入力するか、**参照** をクリックしてファイルを選択します。

パスは、エージェントを実行しているマシンの相対パスです。デフォルトパスは Silk Test プロジェクトフォルダのパスであり、デフォルトの名前はスイート クラスの名前に拡張子 .tlz を付けたものになります。テストを並列実行する場合などに、TrueLog ファイルが上書きされないようにするため、TrueLog ファイル名にプレースホルダーを使用することができます。これらのプレースホルダーは、実行時に適切なデータに置換されます。



注: パスは、実行時に検証されます。Silk Central によって実行されるテストは、スクリーンショットを結果ビューに表示できるようにするために、この値を Silk Central 結果ディレクトリに設定します。

5. **スクリーンショットモード** を選択します。

デフォルトは、**エラー時** です。

6. 省略可能：**遅延** を設定します。

この遅延により、ビットマップが撮影される前にオペレーティングシステムがアプリケーション ウィンドウを描画する時間を確保できます。キャプチャされたビットマップでアプリケーションが適切に描画されない場合は、遅延時間を増やしてください。

7. **OK** をクリックします。

TrueLog Explorer で TrueLog を開く

デフォルトでは、他の Silk Test テスト結果ファイル (.res) と同じディレクトリに TrueLog が保存されます。しかし、TrueLog ファイル (.xlg) の新しい場所を指定できます。

TrueLog は、他の Silk Test 結果ファイル (test1.res や test1.xlg など) と同じベース ファイル名を持ちますが、拡張子は .xlg になります。

1. **スタート > すべてのプログラム > Silk > Silk Test > ツール > Silk TrueLog Explorer** を選択します。
2. **ファイル > TrueLog の追加** または **ファイル > TrueLog On Error ファイルの追加** を選択します。**ファイルを開く** ダイアログ ボックスが開き、指定したファイルの種類が **ファイルの種類** リスト ボックスで選択されます。
3. 該当するテストのディレクトリに移動し、調査対象のファイルを選択します。
4. 省略可能：**比較ビューで開く** チェック ボックスをオンにすると、ファイルは比較ビューで開きます。
5. **OK** をクリックします。



注: 複数の TrueLog を TrueLog Explorer で同時に開くこともできます。

TrueLog 内のエラーを検索する

TrueLog Explorer を使用すると、テスト結果内の再生エラーを見つけるのに役立ちます。それらのエラーに基づいて、テスト スクリプトに必要な修正を加えることができます。



注: メニュー ツリーを見ると、エラーが含まれているノードには、赤い "X" 印が付いています。

1. TrueLog メニュー ツリーで TrueLog を選択します。
2. **編集 > エラーを検索...** を選択します。**エラーの検索** ダイアログ ボックスが開きます。
3. **検索範囲** リスト ボックスから、以下の項目のいずれかを選択します。
 - **開いているすべての TrueLog** - 開いているすべての TrueLog 内のエラーを検索します。
開いているすべての TrueLog オプションはデフォルトで選択されます。
 - **選択した TrueLog のみ** - アクティブな TrueLog 内のエラーのみを検索します。
4. **検索対象** グループ ボックスで、検索する項目の横にあるチェック ボックスをオンにします。
 - エラーを検索に含める場合は、**エラー** チェック ボックスをオンにします。
 - 警告メッセージを検索に含める場合は、**警告** チェック ボックスをオンにします。

- 情報メッセージを検索に含める場合は、**情報** チェック ボックスをオンにします。

5. **検索方法** グループ ボックスで、エラーを検索する方法を指定します。

- アクティブ ノードから検索を開始するには、**選択したノードから検索を開始する** オプション ボタンをクリックします。
- 最初に検出された、エラーを含んでいるノードから検索を開始するには、**最初のエラーから検索を開始する** オプション ボタンをクリックします。

6. 一度に 1 つのエラーを検索しながら TrueLog 結果ファイル内を移動するには、**次を検索** をクリックします。

検出されたエラーに対応する Silk Test のテストケースにリンクすると、エラーの修正または情報の更新を行うことができます。

TrueLog セクション

TrueLog にセクションを追加して、複雑なスクリプトを、名前の付けられた小さなパーツに論理的に分割して構造化できます。

TrueLog セクションは入れ子状にすることができます。また、名前は一意である必要は無く、複数のセクションで同じ名前を使用できます。

TrueLog ファイルに新しいセクションを作成するには、次のコードを使用します。

```
openTrueLogSection("section_name")
```

最後に開いた TrueLog セクションを閉じるには、次のコードを使用します。

```
closeCurrentTrueLogSection()
```

次の場合には、セクションは自動的に閉じられます。


- テストケースの終了
- テストクラスの終了
- テスト実行の終了
- キーワードの終了
- 例外の発生

以下に、TrueLog セクション の使用例を示します。

サポートするメソッドの詳細については、Silk Test クライアントの API ドキュメントを参照してください。

比較モードを有効にする

再生 TrueLog と対応する記録 TrueLog を比較して再生エラーを分析するには、比較モードを使用します。**ファイルを開く** ダイアログ ボックスで **比較ビューで開く** チェック ボックスをオンにすると、TrueLog が自動的に比較モードで表示されます。オフにすると、TrueLog はデフォルト ビューで表示されます。

 **注:** 比較モードでは、記録と再生の **ソース** ビューを、左右ではなく上下に配置できます。 **ソース** ビューを左右に並べて比較するには、**表示 > 左右に並べて比較** を選択します。

1. TrueLog メニュー ツリーで TrueLog を選択します。

2. 以下の手順の 1 つを実行します。

- **比較モード** をクリックします。
- **表示 > 比較モード** を選択します。



注: TrueLog の比較には、複数のエントリ ポイントやアプローチが利用可能です。

2つの TrueLog を比較する

2つの TrueLog を比較すると、同じテスト スクリプトによって生成された複数のテスト実行の過程をたどることで、再生エラーを識別できます。4Test スクリプトは、Silk Test 内で編集する必要があります。

1. **ファイル > TrueLog の追加** を選択します。 **ファイルを開く** ダイアログ ボックスが開きます。
2. 比較する最初の TrueLog を選択して、**開く** をクリックします。 TrueLog が TrueLog メニュー ツリーに表示されます。
3. **ファイル > TrueLog の追加** を選択します。 **ファイルを開く** ダイアログ ボックスが開きます。
4. 比較するもう 1 つの TrueLog を選択します。
5. **比較ビューで開く** チェック ボックスをオンにします。
6. **開く** をクリックします。 TrueLog メニュー ツリーで、2 つ目の TrueLog が最初の TrueLog の下に表示されます。
7. **編集 > TrueLog のステップ スルー...** を選択します。 **TrueLog のステップ スルー** ダイアログ ボックスが表示され、[Silk Test] ノード オプションが選択されています。
8. **次を検索** をクリックし、2 つの TrueLog ファイルを一度に 1 ノードごとを並べて移動します。

TrueLog を閉じる

TrueLog の分析が終わったら、TrueLog を閉じてメニュー ツリーから消すことができます。

1. TrueLog のメニュー ツリーで、閉じたい TrueLog を選択します。
2. **ファイル > 選択した TrueLog を削除** を選択します。

代替方法: 開いているすべての TrueLog を閉じるには、**ファイル > すべての TrueLog を削除** を選択します。

Silk Test のパフォーマンスの考慮事項


ビットマップやコントロールを TrueLog に記録すると、Silk Test のパフォーマンスに悪影響を及ぼすことがあります。ビットマップの取得や情報の記録を行うと TrueLog ファイルが大きくなることがあるので、エラーとなったテストケースのみを記録 (TrueLog on Error) したい場合があります。その場合、必要に応じて TrueLog のオプションを調整して、その他のテストケースに対処することができます。

デバッグが必要な長時間の回帰テストを実行している場合、エラーとなったテストケースのビットマップのみを取得できます (TrueLog on Error)。このオプションは、**TrueLog Options** ダイアログ ボックスで設定します。

Silk Test Classic と Classic Agent で作業している場合、(**TrueLog Options** ダイアログ ボックスの **Actions Settings** タブで) 記録するように指定した各アクション タイプは、TrueLog メニュー ツリーで新しいノードになります。対象となるアクション タイプのみを記録することをお勧めします。

TrueLog を取り扱う場合のヒント

これらのヒントは、Silk Test Classic と Classic Agent で作業している場合にのみ有効です。

 **注:** TrueLog Explorer for Silk Test では、現在、4Test スクリプトのカスタマイズやアプリケーション プロトコル特有の機能はサポートされません。

「アクティブ ウィンドウ」ではなく「デスクトップ」のビットマップ取得の有効化

テスト対象のアプリケーションの他に別のアプリケーションやダイアログ ボックスが表示されていると思われる場合、アクティブ ウィンドウのみの画像ではなくデスクトップ全体の画像を取得することをお勧めします。これを行うには、**TrueLog Options** ダイアログ ボックスの **Enable Bitmap Capture** グループ ボックスで、**On error** をオンにして、**Desktop** をクリックします。エラーがテスト対象のアプリケーションではなくシステムの状態によって発生していると思われる場合は、このオプションの使用を検討してください。

表示されていないコントロール

TrueLog Explorer は、画像の取得時に表示されていないコントロールの画像を取得することはできません。TrueLog ビットマップに特定のアクションに関連するコントロールを表示させるには、画面をスクロールしてコントロールを表示する必要があります。

ビットマップに取得された SetText アクションおよび MultiText アクション

SetText アクションおよび SetMultiText アクションのビットマップを取得した場合、TrueLog Explorer は、赤い大きな文字をビットマップに重ね合わせて、それらのアクションに設定されたテキストを表示します。テキストは、テキストが入力されたコントロールとは関係なく、ビットマップの物理的な中心に配置されます。これは、取得されたビットマップにコントロールが表示されていない場合に、勘違いすることがあります。

[結果] ビューに表示できない文字が含まれている場合

結果 ビューのデータに表示できない文字が含まれている場合、そのデータは ASCII と 16 進数文字の両方で表示されます。この動作は、TrueLog Explorer の **オプション** ダイアログ ボックスを使用して無効にできます。TrueLog Explorer で **設定 > オプション...** を選択して、**表示** タブをクリックします。**データ形式** グループ ボックスのすべてのチェック ボックスをオフにします。

TrueLog で非 ASCII 文字が正しく表示されない理由

TrueLog Explorer は MBCS ベースのアプリケーションであるため、正しく表示するには、すべての文字列が MBCS 形式でエンコードされている必要があります。TrueLog Explorer でデータを表示およびカスタマイズすると、データが表示される前に、多数の文字列変換処理が発生することがあります。

UTF-8 でエンコードされた Web サイトをテストする場合は、文字列を含むデータをアクティブな Windows システム コード ページに変換できないことがあります。このような場合、TrueLog Explorer は変換できない非 ASCII 文字列を、構成可能な置換文字 (通常は「?」) で置き換えます。

TrueLog Explorer で非 ASCII 文字列を正確に表示するには、システム コード ページに適切な言語 (日本語など) を設定します。

索引

記号

- オプションの設定
 - TrueLog 9
 - TrueLog Explorer 9

数字

- 4Test
 - オプションの設定 10
 - スクリプトのカスタマイズ 22

B

- BR
 - 情報ペイン 6

C

- CID
 - 情報ペイン 6

M

- Main 関数
 - メニュー ツリー 5

P

- PID
 - 情報ペイン 6

S

- Silk Test
 - エージェント 8

T

- TL
 - 情報ペイン 6
- TrueLog
 - オプションの設定 9
 - Classic Agent のオプション 11
 - Open Agent のオプション 14
 - Silk Test Classic で有効化する 8
 - Silk4J で有効化する 15
 - Silk4NET での有効化 18
 - エラーを検索する 20
 - 構成 16, 19
 - サポート対象アプリケーション 7
 - 制限事項 8
 - セクション 21
 - 前提条件 8
 - 閉じる 22

- はじめに 4
- 非 ASCII 文字の置換 23
- 比較する 22
- 開く 20
- ヒント 22
- 不正な非 ASCII 文字 23
- 有効化 16, 18, 19

- TrueLog Explorer
 - オプションの設定 9
 - TrueLog の有効化 18
 - インターフェイス 4
 - 結果を表示する 11
 - 構成 16, 19
 - スクリプトを使用して実行時に切り替える 10
 - 有効化 16, 19
- TrueLog On Error
 - 開く 20
- TrueLog Options - Classic Agent
 - ダイアログ ボックス 11
- TrueLog オプション - Open Agent ダイアログ ボックス
 - ダイアログ ボックス 14
- TrueLog の有効化
 - TrueLog Explorer 18

あ

- [アクションの後] タブ 6
- [アクションの前] タブ 6
- アクティブ ウィンドウ
 - メニュー ツリー 5
- アプリケーション状態ノード
 - メニュー ツリー 5

え

- エージェント
 - Classic 8
 - Silk Test 8
 - 開く 8
- エラー
 - 検索する 20

か

- 完了ステータス
 - 情報ペイン 6

き

- キーワード駆動テスト
 - Eclipse から実行 16

け

- [結果] タブ 22
- 結果を表示する

こ

コマンドライン
 テストの実行 17
[コントロール] タブ
 情報ペイン 6

さ

差分ビューア 8
サポート対象アプリケーション
 TrueLog 7

し

状態復元
 メニュー ツリー 5
情報ペイン
 TrueLog Explorer 6

す

スクリプト
 メニュー ツリー 5

せ

製品
 概要 4
 はじめに 4
セクション
 TrueLog 21

そ

操作
 メニュー ツリー 5
[ソース] タブ 6
ソース ペイン 6

た

タブ
 アクションの後 6
 アクションの前 6
 結果 22
 ソース 6

て

停止
 テスト 16
テスト
 Eclipse から実行 16
 コマンドラインからの実行 17
 実行中の停止 16
 分析する 21, 22
テスト計画
 メニュー ツリー 5
テストの実行
 停止 16

は

パースペクティブ
 Explorer 4
 ビューア 4
パフォーマンスの考慮事項 22

ひ

比較モード 21
ビットマップ
 キャプチャ 22
ビューア パースペクティブ 4
開く
 TrueLog 20

へ

ペイン
 ソース 6
 情報 6

め

メニュー ツリー
 TrueLog Explorer 5

も

モード
 比較 21

よ

[呼び出し履歴] タブ
 情報ペイン 6